

大空博教授略歴・主要著作目録

略 歴

1937年 5月30日	福岡県に生まれる。
1945年 2月	国民学校 1年生まで幼児期を過ごした中国・上海から引き揚げ
1956年 3月	福岡県立大牟田北高等学校卒業
1961年 3月	京都大学文学部フランス語学フランス文学科卒業
1961年 4月	読売新聞社東京本社入社（記者職）
1996年 9月	フランス政府給費留学
1967年10月	読売新聞東京本社外報部（現在・国際部）勤務
1970年 5月～1973年 2月	サイゴン特派員
1974年 9月～1978年 5月	パリ特派員・支局長
1980年 8月	外報部次長
1985年10月～1988年11月	ロンドン特派員・欧州総局長
1988年12月	編集委員
1991年10月	解説部長 兼務・論説委員
1992年12月	編集局次長 兼務・解説部長，論説委員
1993年 4月	調査研究本部総務（局長職） 兼務・月刊誌『This is 読売』編集長
1995年 3月	定年扱い退職
1995年 4月	読売新聞社社友
1996年 7月	立命館大学国際関係研究科で夏期集中講義「異文化コミュニケーション論特講」
1997年 7月	同上
1998年 4月	立命館大学国際関係学部教授
1999年 4月～2000年 3月	立命館大学協議会委員
2000年 4月～2001年 3月	国際言語文化研究所専任研究員

所属学会

社団法人・日本記者クラブ 日本エッセイスト・クラブ 日本国際政治学会
日本マスコミュニケーション学会 日仏政治学会

業績一覧

著作

単著

『特派員の眼』新潮社 1997年12月

共著

『現代フランス生活情景』有斐閣 1983年 8月

西川長夫，天羽均，宮島喬，木下賢一，稲本洋之助との共著

第7章「カトリック 市民生活と教会」国防と外交のナショナリズム（191 - 214，273 - 300）

『フランスの新しい風』中央公論社 1988年 8月

辻邦生，友田錫，山本一郎，柏倉康夫，和田俊との共著（編者・辻邦生）

第4章「君のパリ，ぼくのパリ」（107 - 136）

『20世紀文学紀行』読売新聞社 1990年 5月

読売新聞文化部記者を中心とした取材団との共著，初出・読売新聞。東京から現地へ出張取材して執筆した。

「リマ M・バルガス＝リョサの『都会と犬ども』」89年3月27日，「サンチャゴ パブロ・ネルーダの『大いなる歌』」89年4月15日，「ブエノスアイレス ホルヘ・ルイス・ボルヘスの『プロディーの報告書』」89年4月24日

『巨大遺跡を行く』読売新聞社 1991年 4月

読売新聞文化部記者を中心とした取材団との共著，初出・読売新聞。東京から現地へ出張取材し執筆

「ヨルダン：紀元前2 - 後3世紀のペトラ ばら色に染まる宝物庫（上）90年3月5日，「ペトラ 砂と岩山に民族の記念碑」（下）90年3月6日，「イスラエル：紀元前2世紀 後1世紀 マサダ ユダヤ魂を鼓舞する聖地」（上）90年4月16日，「戦場跡から“死海文書”」（下）90年4月23日，「ベトナム：4 - 11世紀のミソン チャムの聖地 飛天の舞，遠い記憶に」90年10月30日，「ベトナム：4 - 17世紀 ニャチャン 豊饒の海に女神の幻影」90年10月31日

『読売新聞百二十年史』読売新聞社 1994年11月(社史編集委員による分担執筆)

第3章 第10節「ベトナム戦争に総力戦」(313 - 316)

『20世紀随想』読売新聞国際部 2000年11月

読売新聞外報部(現在・国際部)OBとデスク100人による共著

第2章の中の「1968年から70年代へ躍進のとき」(88 - 90)

『クリティーク国際関係学』東信堂 2001年4月

朝日稔, 永田秀樹, 中川涼司(以上3人・兼編者), 松下冽, 中達啓示, 本名純, 高橋伸彰, 丸岡律子, 中本真生子, 原毅彦との共著。2001年度から立命館大学国際関係学部・1回生「基礎演習」の教科書 第9章「グローバル時代の報道とマスメディア」

『実践ジャーナリズム読本』中央公論社 2002年3月

読売新聞社の現役・OBとの共著。第2章「私のジャーナリズム論」の中のひとつ, 「世界を読み解くためのジャーナリズム」を担当

『複数の沖縄』の中の「2001年夏 沖縄」人文書院 2003年2月

共編著

『20世紀のドラマ 現代史再訪』(, ,)東京書籍 1992年5月

読売新聞の海外特派員との共著, 初出・読売新聞。企画・コーディネーター, 筆者の一人として, 小倉貞男, 木村晃三, 丹藤佳紀とともに参画。

「予言者ドゴール・“大統領を暗殺せよ” ついにテロ指令は下った」(上) 91年2月19日

「予言者ドゴール 私は生まれてからずっと...使命感に貫かれた生涯」(下) 91年2月20日

「戒厳令前夜 グダニスクの暑い夏から舞台は暗い冬へ」(上) 91年7月23日, 「戒厳令前夜

“よし, 行かないよ” プレジネフは約束したが...高まる内戦の危機」(下) 91年7月24日

翻 訳

単訳

ミシエル・クロジエ 『アメリカ病』読売新聞社 1982年8月

ケネス・ハリス 『マーガレット・サッチャー』読売新聞社 1991年8月

ホースト・ファース, ティム・ペイジ編 『レクイエム』集英社 1997年10月

共訳

マリオ・ヴェルドーネ 『ロッセリーニ』三一書房 1976年6月

「現代のシネマ」(全10巻・フランス語版)の1冊, 梅本浩志との共訳

ベルナルド・ゲッタ 『ポーランドの夏 激動の20日間』新評論 1981年1月

1980年夏ポーランドの激変を伝える仏ルモンド特派員の一連のルポ。川島太郎との共訳

新聞・雑誌への翻訳

「川端文学と西欧」(上)(下) 読売新聞 1968年10月28, 29日

川端康成のノーベル賞受賞にさいしてエドワード・サインデスティッカーが文化面に寄稿した英文の翻訳

「サッチャー来日 記念講演 世界と日本」 「This is 読売」 1995年1月号

「シモン・ペレス 文明との対話 ジョージ・ソロスと語る」 読売新聞 1998年5月5日

「シモン・ペレス 文明との対話 ビル・ゲイツと語る」 読売新聞 1998年11月8日

紀 要

「68年5月のころ」 立命館国際研究12巻3号 2000年3月

「1945年 日本の夏 敗戦直前の“情報空白”を読む」立命館言語文化研究 第12巻3号
2000年11月

雑誌などへの執筆

「ふらんす」(語学雑誌・白水社)のコラム「POLITIQUE」と「FAITS DIVERS」二つの欄に
1980年3月号から82年5月まで執筆

『基礎フランス語』(語学雑誌・三修社)のコラム「時事 エッセー」を1980年5月から81年5
月まで執筆

「純情小説 大復活 女性とらえるB・カートランド作品 英ベストセラーから」 「This is 読
売」 1987年10月号

「気がかりな文化摩擦 英マスコミが無視した日本首相の公式訪問」 「This is 読売」 1988年9月号

「ヌーボー・パリ 200年目を迎えた巴里」 中央公論社 1989年5月

ムック版『フランス革命 200年の旅』の中のフォトエッセイ。写真・渡部雄吉

「シリーズ世界の指導者たち サッチャー」 月刊公論 1989年10月号

「異郷の旅人をやさしく迎える スコットランド」 GLOBAL PRESS 1990年特別号

「歴史散歩の楽しみ」 目白大学新聞 1997年7月25日

「報道写真が語る真実」 『青春と読書』 集英社 1997年10月号

「星の輝き」 『波』 新潮社 1997年12月号

「言葉は魔物」 俳句雑誌 『鷹』 巻頭エッセー 鷹俳句会 1997年8月号

「生の風景」 俳句雑誌 『鷹』 巻頭エッセー 鷹俳句会 1998年4月号

「書いた話 書かなかった話 独裁者フランコ統領の死」 日本記者クラブ会報 第364号
2000年6月10日